

上越教育大学研究プロジェクト 終了報告書

研究代表者 所属・職名 学校教育学系・講師

氏 名 坂口嘉菜

研究期間 令和6年度～令和7年度

研究プロジェクトの名称	上越教育大学附属小学校通級指導教室（ポプラールーム）を核とした 幼小連携 —インクルーシブ教育システム構築モデルの検証と発展—
研究プロジェクトの概要	<p>インクルーシブ教育システムが推進される今日では、通常の学級における特別支援教育の拡充が求められている。通級による指導を受ける児童生徒数は、全体の児童生徒数の減少と反して増加しており（文部科学省、2023）、必要とする教育的ニーズの内容も多様化、重複化している。</p> <p>そのため、通級指導教室においてはニーズに合わせた指導を行うためにも、適切に児童生徒の実態把握を行い、実態把握をもとにして作成される個別の指導計画を活かしながら、児童生徒の学びの連続性を評価していく必要がある。通級指導教室が生育歴を含め子供の情報を正確に把握するのは、子供を多面的に捉え、実態把握をより確かなものにするためと言える。</p> <p>また、幼稚園・保育園を巡回する形式の5歳児健診では問題がないとされる幼児が全体の約50～60%であり、20%の幼児は発達障害、他の20～30%の幼児は発達障害と言い切れないが気になる特徴をもつという報告もある（日本臨床発達心理士会、2008）。</p> <p>通級指導教室担当者がその立場に縛られず、幼稚園・保育園に対して支援の助言を行いながら、幼稚園・保育園の段階から実態把握を行い、就学後の支援の内容を協働的に考えるとともに、通級指導教室が通常の学級の学びを支援することがインクルーシブ教育システム構築モデルの一つとして効果を示すのかを検証し、その内容を発展させることが本研究プロジェクトの概要である。</p> <p>なお、本学は国立大学附属学校に通級指導教室を設ける例として日本の中でも注目されており、その特徴を活かしてインクルーシブ教育システム構築モデルを評価しながら全国に発信を行ってきている。</p>
研究成果の概要	<p>本研究は2年計画で実施された。1年目は附属幼稚園において複数回、幼児の実態について園長及び関係する教諭から情報収集を行った。その情報をもとに、附属小学校通級指導教室担当者が附属幼稚園の活動を参観する日を設けた。参観後は、附属幼稚園の複数の教諭と附属小学校通級指導教室担当者が幼児の様子について話し合い、通級指導教室担当者から行動の解釈や支援方法について助言をしてもらった。また、就学後を見ずえた幼児たちの中心的な課題や附属小学校が準備すること（個別の指導計画作成）などを話し合った。必要に応じて、保護者の同意が得られる場合には後日発達検査を用いてより詳細な実態把握を行い、附属幼稚園と附属小学校で情報を共有した。</p> <p>研究として、附属幼稚園の教諭に対して通級指導教室担当者による巡回・助言・情報共有の効果についてインタビュー調査を行った。インタビュー内容をコード化し、分析した結果、附属幼稚園の教諭からは「子どもの観たて」について大きな変革がもたらされたと感じていることが分かった。</p>

	<p>た。通級指導教室担当者との対話によって得られた、幼児の実態把握の際の視点やポイントが附属幼稚園で共有されていたことも明らかになり、一定の効果が認められた。</p> <p>2年目は附属小学校において1年生を中心に、通級指導教室と通常の学級の連携について追跡調査及び関係者に対するインタビュー調査を行った。追跡調査の中では、附属幼稚園での実態把握をもとに入学期から細かな配慮が行われていたことや、早期に個別の指導計画を作成し、保護者の同意が得られていたことが明らかとなった。インタビュー調査の中で、通級指導教室担当者はその要因を「附属幼稚園のときから保護者と子どもの実態について共有し、意思疎通を図ることができたため、児童が通級指導教室利用につながるまでの流れがスムーズであった」と語っていた。</p> <p>また、担任教諭も附属幼稚園での様子を通級指導教室担当者から事前に聞いていたことで、早期から授業づくりの工夫ができた話し、児童が安心して登校していることから、本実践の利点であるとしていた。</p> <p>通常の学級の担任教諭が通級指導教室での児童の様子を把握し、ときには学びの様子を参観することもあった。その他、校内では休み時間にポプラ工作タイムという活動が設定され、通級指導教室（ポプラルーム）を利用する児童だけでなく、全ての児童が参加できる工作の活動の場が開かれた。年間に6回実施され、1回の活動に約20～30名の児童が参加した。通級指導教室を利用している児童が役割を担うこともあり、通級指導教室での学びを存分に発揮する児童の様子が見受けられた。校内全体での取り組みが生まれていったことも、本実践の効果と言えるだろう。なお、ポプラ工作タイムには上越教育大学の学部生や大学院生が補助スタッフとして参加し、教員養成の場としても意義があったと考えられた。</p>
<p>研究成果の発表状況 (※今後の予定も含む。)</p>	<p><研究成果の一部を発表した研究会></p> <p>令和8(2026)年1月21日に上越教育大学において上越市教育センターとの共同開催により「通常の学級と通級の効果的な連携研修」を実施した。この研修の中で研究成果の一部の発表を行った。</p> <p><研究成果の一部を発表した論文及びポスター発表(発表済み)></p> <p>関原真紀・藤井和子・坂口嘉菜(2025)通常学級担任と通級担当者の連携による授業実践の効果. 日本教育大学協会研究年報, 43, 123-133.</p> <p>関原真紀・坂口嘉菜(2025)教師間連携に関する自校通級と他校通級の比較① -A県における連携実態のアンケート調査から-. 日本LD学会第34回大会 ポスター発表, P10-01.</p> <p>坂口嘉菜・関原真紀(2025)教師間連携に関する自校通級と他校通級の比較② -A県におけるアンケート調査の自由記述の分析から-. 日本LD学会第34回大会 ポスター発表, P10-04.</p> <p><研究成果に関する論文(執筆・投稿中)></p> <p>「通級指導教室を核とした国立大学附属幼稚園及び附属小学校の連携に関する実践的研究」(仮題)</p>
<p>学校現場や授業への研究成果の還元について</p>	<p>上記の研修は児童発達支援センターや幼稚園・保育園・子ども園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等の教職員の参加があり、通常の学級と通級指導教室の効果的な連携に向けての研究成果を発表することができた。また、その内容については論文等を通じて全国にも発信している。</p>